

山形県中川代遺跡の石鉞と日向王之山の玉璧

李 国 棟

【キーワード】石鉞、戊、越、蟠螭文、穀文璧

拙論「玉で結ぶ日本列島と長江下流域」¹⁾では、北越地方と日向地方が玉を絆に中国の長江下流域の越地方と緊密につながっていることを指摘したが、本論では山形県羽黒町中川代遺跡から出土した石鉞と、日向国那珂郡今町（現宮崎県串間市）王之山の石棺から出た玉璧を考察対象とし、北越地方と山形県沿海側を含めた「こし」地方²⁾や日向地方と長江下流域の越地方との関係についてさらなる考察を行いたい。

1. 石鉞の出土

中川代遺跡は五〇〇〇年～四〇〇〇年前の縄文中期の遺跡である。羽黒山西麓の標高225メートルの高台にあり、その西側は庄内平野である。日本海から20キロメートルほど離れているが、四〇〇〇年前の海面はammonia海進によって今より3～5メートルほど高かった³⁾ので、中川代遺跡は直接日本海を眺望できる位置にあったと推察される。

この中川代遺跡から、中国の石鉞（末頁の写真1を参照）が一件出土した。そして、この石鉞には漢字と思われる文様が刻まれており、長年来、縄文時代の渡来文化が議論される場合、この石鉞が常に議論の対象となってきた。

この石鉞の発見者は梅本成視氏である。彼はもともと羽黒中学校の教諭であり、1966年「郷土研究クラブ」を創り、そのクラブ活動の一環として中川代遺跡を調査したのだが、後年、梅本氏はこの石鉞の出土について次のように回想している。

この有孔石斧は、昭和四十一年六月の発掘の際に、地下約四〇センチほどで、縄文中期の土器や石器の折損品とともに出土した。大きな石斧が赤土にまみれて出てきて、水洗いをしたら、刻み文様が現われた。こんな石斧があったのかと驚いた。かつて見たこともない石斧であったので参考書等で調べてみたが不明だった。だが、貴重な資料として保管しておいたものである。

その後、私も身辺が多忙となり発掘から離れて久しい。教員を退職したので、平成六年五月に、学生たちに学習の場を提供するための考古資料室を自宅二階につくった。これが機縁となって、旧知の浅川先生と玉川学園関係者の来訪となり、この有孔石斧が紹介されることとなった。この有孔石斧が研究により、やがて解明されることを切に願っている⁴⁾。

昭和41年6月、すなわち1966年6月にこの石鉞が出土したわけだが、しかし、1994年8月に浅川利一氏がこの石鉞と出会うまで、世間はその存在を知らなかった。

1994年9月、この石鉞の特異性を察知した浅川氏はただちに北京を訪問する東京都文化科の岡崎完樹氏にこの石斧の実寸大——高さ12.5cm、幅7.6cm、厚さ1cm——の写真を託して、朱延平、徐天進、張忠培三氏に意見を求め、大汶口文化あるいは良渚文化の所産である⁵⁾との回答を得た。1997年6月、浅川氏はまた直接蔡鳳書氏に意見を請い、「大汶口文化の所産と思う。山東省で作られたものが対岸の遼寧省に渡り、韓国北部から渤海方面に行き、海を南下した可能性もある」⁶⁾との回答を得た。同年9月、浅川氏はさらに「石鉞」のレプリカを持って上海博物館を訪ね、黄宣佩館長に意見を求めた。

孔の開けかたも両方から開ける方法で、中国の古代の石斧です。石質は、こちらでは板岩あるいは頁岩といいます。良渚文化とは少し違います。良渚は頭部が平らで下部が湾曲しており、断面が平らで、管鑽という管状のもので孔を開けます。この石斧はおそらく良渚文化よりも古く、馬家浜文化あたりでしょう。また黄河下流域の大汶口文化、それも中頃より古い特徴を持っています。⁷⁾

以上は上海博物館館長黄宣佩氏の意見である。中国の学者たちの意見を聞いた後、浅川氏はこの石鉞が尋常ならぬ意義を持つものと確信するようになり、日本海沿岸と中国大陸との文化交流に視野を広げ、この「石鉞」の背後にある「直接的な政治的背景や渡海技術の研究だけでなく、比較装身具や原始「神」観念まで追ってみたいと考えはじめ」⁸⁾たのであった。

2. 石鉞の年代

これまで、この石鉞に関する論文は何篇も発表されている。しかし、いずれもその核心にまで迫ることができなかった。その原因を追究すると、主に二つあると思う。一つは石鉞と石斧が日本では伝統的に区別されていないこと、今一つはこの石鉞が長江下流域の越族と結びつけて考えられていないことである。

この石鉞の名称について、松浦宥一郎氏は「山形県羽黒町発見の石鉞について」と題する論文⁹⁾の中で次のように分析している。

石鉞・玉鉞は、基本的に両刃の扁平な石斧の形をしており、器身の上方に円孔を穿つものである。いわば「扁平有孔(磨製)石斧」・「扁平穿孔(磨製)石斧」と称するべきものであるが、木を伐るための肉厚両刃の磨製石斧とは異なるものである。扁平という点では「鏹」とも呼ぶことができるが、鏹は基本的に片刃であるので、両刃の鉞とは異なる。

石斧が「肉厚両刃」であるのに対して、石鉞は「扁平有孔」である。「扁平有孔」という点では、鏹も同様であるが、ただ鏹は基本的に片刃であるので、両刃の鉞と全く異なっている。松浦氏はこう分析した上で、中川代遺跡から出土したこの石鉞は「中国産の典型的な梯形をした扁平

有孔両刃の『石鉞』そのものであって、伐木用の磨製石斧ではない」と結論づけているのである。

筆者は松浦氏の以上の分析に全く賛成である。文化的に言えば、「石斧」と「石鉞」で神聖度がまったく異なっており、中国では石鉞がまた特別な地域性を示す場合もある。そのため、山形県中川代遺跡から出土したこの石鉞の真義を解明するには、まず「石斧」と呼ばれているこの石鉞を「石鉞」と正式に称呼しなければならないのである。

山形県中川代遺跡のこの石鉞の年代について、以上に引用した中国の学者たちは大汶口文化、馬家浜文化、良渚文化との関連性を指摘しているが、年代の正確さを計るために、ここで少し整理をしておきたい。

大汶口文化は炭素14年代六三〇〇～四五〇〇年前の先史文化であり、黄河下流域の山東半島を中心としているが、馬家浜文化と良渚文化は長江下流域の越族の先史文化である。そして、長江下流域の越族の先史文化をさらに詳しく分けると、最も古いのは炭素14年代七〇〇〇～五五〇〇年前の河姆渡文化、その次は六五〇〇～六〇〇〇年前の馬家浜文化、馬家浜文化を受け継いだのが六〇〇〇～五二〇〇年前の崧沢文化であり、良渚文化はさらにその後位置し、五三〇〇～四二〇〇年前に出現し、長江下流域の越族の先史文化を集大成させた文化であった。年代的には、河姆渡文化、馬家浜文化、崧沢文化、良渚文化の間にはそれぞれ重なる部分があるが、基本的には河姆渡文化→馬家浜文化→崧沢文化→良渚文化という継承関係が見られ、良渚文化はまた中期以降の大汶口文化に影響を与えていたのであった。

越族の良渚文化は玉鉞、玉琮、玉璧を「三種の神器」とし、玉鉞を最高級の神宝として珍重していた。末頁の写真2は典型的な良渚文化の玉鉞である。1977年に中国江蘇省呉県張陵山遺跡から出土したもので、現在、南京博物館に収蔵されている。高さ17.6cm、厚さ1.1cm、肩幅10.4cm、刃幅12cm、寸法は山形県中川代遺跡の石鉞より高さ、幅とも5cmほど大きい、厚さは0.1cmの微差にとどまっている。

末頁の写真3も典型的な良渚文化の玉鉞であり、1986年に中国浙江省余杭県反山遺跡から出土し、現在、浙江省文物考古研究所に収蔵されている。その寸法は、高さ17.9cm、厚さ0.8cm、肩幅14.4cm、刃幅16.8cm。写真2の玉鉞より肩幅も刃幅も4cm以上大きいこの玉鉞には、もう一つ大きな特徴があり、その正面には良渚文化特有の神徽が刻まれているということである。図案1を見ると分かるが、この神徽の上半部は光芒を放った太陽神の頭であり、その下半部は腕以下の胴体である。そして、上半部と下半部は重層的に見える。下半部の胸の左右両方には大きな円形がある。全体的に見れば、この二つの円形は太陽神の乳房と見られるが、腕以下の下半部だけを見れば、また良渚文化の山神「魍」の大きな目でもあるので、この重層的な構図は良渚文化の中で太陽神と山神が一体化されていることと、玉鉞の所有者は太陽神と山神を合体させた最強で最高の指導者であったことを示しているのである。

この最高級の玉鉞が出土した良渚文化の反山遺跡は良渚文化における最高ランクの貴族墳丘墓

であり、その東南二〇〇メートルのところに、良渚文化の中心都城の跡地莫角山遺跡がある。反山遺跡と莫角山遺跡はいずれも四八〇〇～四五〇〇年前の遺跡であり、その時期は良渚文化の最盛期であった。そしてこの最盛期に、良渚の軍隊は良渚文化圏の北側に位置する大汶口文化圏に侵入した。江蘇北部の山東省寄りに位置し、良渚軍によって占領されていたと考えられる新沂花厅村遺跡がその証拠である¹⁰⁾。そして二、三〇〇年後、北側にある大汶口文化が減じ、山東龍山文化はその後を受け継いだ。それにもかかわらず、南からの良渚文化の影響は相変わらず強かった。さらに四〇〇年ほど経つと、黄河中流域には夏王朝が樹立され、二里頭文化が新たに開花したが、しかし、それと黄河下流域の山東龍山文化や長江下流域の良渚文化との間には本質的な淵源関係があった。末頁の写真4は中国山東省臨朐県朱封村の龍山文化期の大墓から出土した玉鉞であるが、この玉鉞と極めて似ている玉鉞が、夏王朝の河南偃師二里頭遺跡からも出土している。中国の学者杜金鵬氏と楊菊華氏はその編著『中国史前遺宝・黄河下游遠古文化』¹¹⁾で、この二件の玉鉞について次のように解説している。

河南偃師二里頭遺跡から玉鉞が一件出土した。長さ9.2cm、幅8.9cm、正方形に近い。穴が二つあり、外形や穴の位置と数から見ると、朱封大墓のその玉鉞と極めて似ている。ここにおいて、中国文明が強い連続性を具えていることの実例がもう一つ得られたわけである。

玉鉞の形状によって、山東龍山文化と夏文化の継承関係が証明されたわけだが、一方、夏王朝による玉鉞の製造自体はまた、夏王朝が良渚文化の伝統を受け継いでいることを物語っている。夏王朝を切り開いた初代王は禹とされている。しかし実際、この禹は長江流域の出身で、浙江省紹興市の郊外に、その墓が残っている。良渚文化と夏王朝の間には、やはり本質的なつながりがあったのであろう。

三六〇〇年前、夏王朝は殷王朝にとって代わられた。しかし、殷王朝も鉞文化を継承しており、『史記・殷本紀』の「湯自ら鉞を把り、以て昆吾を伐ち、遂に桀を伐つ」という記録がその証拠である。実は『尚書・牧誓』の「左には黄鉞を杖き、右には白髦を乗りて以てて麾す」という記録からも分かるように、三一〇〇年前、周の武王は殷の紂王を討伐する際にも「黄鉞」を手を持っていた。すなわち殷王朝を打倒した周王朝も鉞文化を継承していたのである。要するに、鉞文化は長江下流域の越地方を発祥の地として良渚文化期から夏文化期、殷文化期を経て周文化期に至るまでずっと継承されてきたのであり、山形県中川代遺跡から出土したその石鉞もこのような文化的背景の下で考察されるべきであろう。

「管鑽」という孔の開け方から判断すれば、山形県中川代遺跡の石鉞は長江下流域の越地方で作られた物にちがいない。その製作年代について、意見が分かれてはいるが、松浦宥一郎氏は前掲の「山形県羽黒町発見の石鉞について」において、中川代遺跡の石鉞に刻まれた文様を「甲骨文字、もしくは甲骨文字に近いもの」と考え、そして、「上口は大きい但实际上に穿たれた孔径は極めて小さくなっている」という二里頭文化以降の変化を重視して、山形県中川代遺跡の石鉞は

少なくとも二里頭文化以降のもので、商（殷）代の可能性もあると断定しており、筆者も同感である。夏王朝の二里頭文化に文字があったかどうかは不明であるが、殷代には甲骨文字がある。そして、山形県中川代遺跡の石鉞に彫られたその文様は確かに殷代の甲骨文字と通じており、両者の共通性から考えれば、山形県中川代遺跡の石鉞は殷代後期、すなわち甲骨文や金文が盛んに作られた三三〇〇年前に、長江下流域の越地方で作られた可能性が高いと結論付けられよう。もちろん、こうなると、三三〇〇年前の石鉞がなぜ四〇〇〇年前の遺跡に埋まっていたかが新たな問題となり、今後、当然のことながらこの問題について新たに考察を進める必要があるのである。

3. 石鉞の用途及びその刻文の意味

前の二節で山形県中川代遺跡の石鉞の時代背景と制作年代について考察し、鉞文化の一品としてその石鉞が、良渚文化を始め、長江下流域の越族の文化伝統を受け継いでいることを明らかにした。しかし同時に、山形県中川代遺跡から出土した鉞はこれまで写真で確認してきた玉鉞とは異なって、石鉞であり、決して同レベルの玉鉞ではないということも忘れてはならない。玉鉞は良渚遺跡の王族が埋葬された大墓からしか出土しておらず、しかも一基の大墓から一件しか出土していないが、石鉞は良渚遺跡の王族ではない墓からも出土しており、一基の墓から数件～数十件も出土している。この点から判断すれば、玉鉞が身分と権力の象徴となっていたのに対して、石鉞は全く別の用途を持っていたように思われる。もちろん、玉鉞が副葬された大墓では石鉞も大量に副葬され、石鉞が身分や権力と全く関係がないとはいえない。ただし、出土した石鉞が複数であったことから分かるように、当時の権力者は決して石鉞で唯一無二の高い身分や絶大な権力を誇示してはいなかった。用途の点では、石鉞はやはり玉鉞と異なっていたのであろう。

「鉞」はもともと金属の鉞を指す文字で、石鉞の場合はその「金ヘン」を取り払って、「戊」と表記すべきである。この石で作られた「戊」は念を押すまでもなく玉鉞の元であるが、同時に「越」の原字でもあったので、長江下流域で生活していた越族は、すなわち「戊」を文化的標識とする民族であったことが明らかになる。

海面が現在より一三六メートルほど低かった二万三〇〇〇年前、越族の先祖はもともと陸地であった東シナ海の大陸棚に生活していた。しかしammonia海進によって海面が上昇してきたので、一万三〇〇〇年前以降、彼らの一部は日本列島に上陸して「外越」になり、一部は長江下流域に後退して「内越」になった。その後、「内越」は長江中流域から稲作文化を導入して、河姆渡文化、馬家浜文化、崧沢文化、良渚文化を次々に創っていったわけだが、この過程において越族の民族性を示す文化的標識「戊」——石鉞が次第に出来上がった。しかし越地方の文化的発展に従い、五三〇〇年前の良渚文化期から玉鉞が出現し、玉鉞と石鉞はついに別々の用途を持つようになった。玉鉞が権力の象徴となったことは前述したが、石鉞は何になったかと言うと、越

族のアイデンティティーを示すIDカードとなったのだと筆者は考える。

「外越」は一万三〇〇〇年前以降日本列島に上陸したが、六〇〇〇年前、日本海沿岸の「こし」地方に集中して住むようになり、「ぬなかわ」政権を創った。伝統的には、現在の福井県から新潟県にかけての地域は「こし」と呼ばれ、「越」という漢字に当てられているが、大昔、「こし」の範囲は更に広く、山形県、秋田県、青森県の沿海側もすべて含まれていた。したがって、山形県中川代遺跡から石鉞が出土しても何の不思議もないわけである。ただし、日本列島の「こし」地方からも中国の石鉞が出土していることによって、日本列島の「外越」と長江下流域の「内越」は石鉞という共通のIDカードを持っていたという事実が浮き彫りになる。多くの人にとっては、この事実の方が意外であったかもしれない。

そもそも、石鉞というIDカードはなぜ必要であり、またどういう状況で用いられていたのだろうか？ 筆者の考えでは、この問題を解くには、長江下流域の「内越」と日本列島の「外越」は同時に石鉞を持っていたという事実が非常に示唆的である。

実際、「外越」の「ぬなかわ」政権も「内越」の河姆渡文化期から良渚文化期までの諸政権と同じく、玉の政権であった。そして福井県金津町の縄文早期末の桑野遺跡から長江下流域の玉瑛が大量に出土したことからも明らかなように、六〇〇〇年ほど前から「内越」と「外越」の間で玉をはじめとする海外交易が行われるようになった。一般的には、組織的に交易や交流が行われる場合、必ずルールが決められるが、さまざまなルールの中で最も重要と思われるのが、互いの身分を示すIDカードを作ることであっただろう。現在もそうであり、1401～1549年の日明「勘合貿易」もそうであり、六〇〇〇年前の「内越」と「外越」の交易もそうであったはずだ。「内越」と「外越」は毎回交易を始める前に、必ず相手が越族のアイデンティティーを示すIDカードとして石鉞を持っているかどうかをチェックしたものと思われる。新潟県上越市の古町B遺跡からは縄文前期の石斧が大量に出土しており、また富山県朝日町境A遺跡からは縄文中期～晩期の石斧が大量に出土している。刃の状態から判断すれば、刃に欠けたところがある一部の大きな石斧は実用の道具であったにちがいない。ただその中には相当数の使用痕跡がない小さな石斧もあるので、それらはもしかすると「内越」と「外越」の交易のために作られたIDカードであったかもしれない。もちろん、両遺跡の石斧を石鉞として論じるのは危険である。しかし、日本の「こし」地方ではなぜ非実用的な石斧が作られていたのかを考えると、当時の「こし」地方では、石斧と石鉞が今日と同じく厳密に区別されていなかった可能性も決して否定できない。一方、良渚遺跡からも同時代の石鉞が大量に出土しており、それらも「内越」と「外越」の交易のために作られたIDカードであったと思われる。そして、この角度から良渚遺跡の一基の墓になぜ数件～数十件の石鉞が副葬されていたのかをさらに追究すると、その墓の埋葬者は「外越」との交易担当者であり、副葬された石鉞の数は「外越」との交易回数を示しているのではないかと考えられる。もちろん、長さ4m～10m、幅0.5m～1mの丸太舟¹²⁾による「内越」と「外越」の海外交

易は困難極まりなく、だからこそ、本人は石鉞を誇りに思ったし、大切にしていた。その家族から考えても、その記録であった石鉞は本人の最も記念すべきものであった。良渚遺跡の数多くの石鉞はまさにこのような意味で副葬されていたのであろう。要するに、このように双方から出土した大量の同時代の石鉞と石斧を結び付けて考えると、縄文前期以降「内越」と「外越」の交流がいかにも盛んに行われていたかをかいま見ることができると同時に、山形県中川代遺跡から出土したその石鉞がどのような目的で「内越」から「外越」にもたらされてきたかを理解することもできるのである。

山形県中川代遺跡の石鉞には「𠄎」という文様が刻まれている。これまで、この刻文を甲骨文の「生」と解説した人がいるが、筆者は甲骨文の「生」ではなく、甲骨文「之」の装飾形態だと考える。「之」の甲骨文は「𠄎」で、石鉞の「𠄎」は「𠄎」より枝状の筆画が二本多い。しかし筆者の考えでは、その二本の筆画は単に装飾的な筆画にすぎず、あってもなくても同じである。浅川利一氏は前掲の「山形県の縄文遺跡から出土した中国古代の有孔石斧」でその文様の類字として甲骨文の「往」「主」「生」「封」「圭」「之」の六字を提示した上で、類似順として「往」と「主」を最上位の①に、「之」を最下位の④にしているが、漢字の筆画にはよく装飾的な筆画が加えられてきた——たとえば、「祈」の甲骨文は「𠄎」であるが、その金文は「𠄎」に変わり、上部「丨」の左右両方に枝上の筆画が一本ずつ付け加えられているのをはじめ、装飾的な筆画が全般的に付け加えられている——ことを考慮に入れて以上の類字の甲骨文を考えると、やはり「之」の「𠄎」とその刻文の間には最も本質的な共通点が認められるのである。

「之」には動詞、代名詞、助詞の三つの品詞があるが、ここの「之」は動詞の「之く」と解される。そして「之く」が「戊」に刻まれているので、全体的な意味は「戊へ之く」、すなわち「越へ行く」ということになる。石鉞が越族のIDカードとして用いられていたという前提で考えれば、この意味は「戊」の用途にふさわしく、「之」はまた文字の次元から、山形県中川代遺跡のその石鉞が「内越」と「外越」の交易時のIDカードであったことを裏付けているのである。

三三〇〇年前は日本の縄文後期後半に相当するが、殷王朝はその時に爛熟期に入り、甲骨文や金文が盛んに用いられ、精緻な青銅器や玉器も次々に製造されていた。銅鉱石や玉などの原材料に対する需要が急速に高まったことは容易に想像できるが、実は、「外越」の「ぬなかわ」政権は豊富な金属資源と玉資源を持っていた。おそらくこれが原因で、「外越」との海外交易を担当する「内越」の責任者の一人が特別に朝廷から「外越」へと派遣されたであろう。その石鉞の刻文からは、「本王のために外越へ之ってまいれ！」といったような威厳のこもった声が聞こえてきそうではないか。

4. 日向王之山の穀文璧

長江下流域の越地方と密接に関わっていたのは「こし」地方だけではなかった。江戸後期、日

向国那珂郡今町の「王之山」の石棺から中国製の穀文璧が一枚出土した。現在、この穀文璧は前田育徳会に収蔵されているが、明治10年12月に書かれた箱書きによると、文政元年（1818年）2月、「村農」である佐吉が彼の所有地の「王之山」で石棺を掘り出し、その中から古玉器や古鉄器を「三十餘品」得た。この箱に収められた「古玉璧」はその中の一品だということである。末頁の写真5と6はその「古玉璧」であり、全く欠損のない「完璧」である。直径33.3cmで、璧面には三種類の文様が入っている。メインの中間部は稲穀をかたどった「穀文」であるが、内縁と外縁にはまたそれぞれ装飾的な文様が刻まれている。しかし、それらの文様については定説がなく、ただ「神獣文」とされる場合が多い。日本の有名な考古学者森浩一氏はその編著『日本の古代2 列島の地域文化』¹³⁾の第三章で、内縁は「夔鳳文」、外縁は「夔龍文」と指摘しているが、中間部に挟まれている「穀文」が意味する稲作との関連性から判断すれば、外縁の文様は到底稲作と必然的な関係がない「夔龍文」とは思えない。実際、日向王之山の穀文璧は長江下流域という特定の地域性を示している。河姆渡文化期以降の文化伝統をふまえてみれば、内縁の文様は河姆渡文化に由来する「陽鳥文」——鳳文の祖形であり、河姆渡遺跡第三文化層から出土した、「双鳥負日」の図案が刻まれている象牙製のペンダントがその証拠である。しかし、外縁の文様は「龍文」そのものではなく、龍神文化の影響によって良渚文化から新たに生み出された「蟠螭文」である。「陽鳥文」は陽光を司る太陽神を意味し、「蟠螭文」は水源を司る山神を意味する。この二神はともに稲作に絶対不可欠なお守りなのである。

龍はもともと黄河以北に起源を持つ文化的シンボルであるが、四五〇〇年前に長江下流域に南下してきた。日本の著名な環境考古学者安田喜憲氏は梅原猛氏との長江文明に関する対談¹⁴⁾で、四五〇〇年前に良渚遺跡が突然一〇〇万平方メートルまでに巨大化した事実と、その頃から龍のような玉器が作られたことをふまえて、「そこにわれわれは北からの文明の影響も多少あるんじゃないか」と見ているわけです。つまり純粋に南だけで発展したのではなくて、北方の畑作牧畜民の影響がそこに出てきて、そういう巨大な王権とか、都市というもの爆発的に拡大される何か要因があったのではないかとみなしているのです」と語っているが、筆者は全く同感であり、そして、安田氏のこの意見は巨大王権の解明だけでなく、新しい山神・螭の解明にも大いに役立つだろうと考える。

鎌田正氏と米山寅太郎氏の共著『漢語林』¹⁵⁾によると、螭は黄色い龍や龍の子の意味のほかに、また伝説上の山神の意味があり、その形は「虎に似て、鱗がある」という。長江下流域には、もともとこのように龍にも虎にも似ていて、しかも「螭」と呼ばれている山神が存在せず、越語には「螭」の方言的対応語音が存在しないことがその証拠である。前掲の拙論「玉で結ぶ日本列島と長江下流域」で述べたが、長江下流域の越族の山神は虎であり、「𪚩」（と）と発音されていた。末頁の写真7がその顔である。しかし、四五〇〇年前に北方の龍神文化が南下して、「𪚩」と龍が習合されたことによって、螭という新しい山神が誕生した。末頁の写真8はその姿であり、

もともと立ち姿の山神「甕」が体を蟠らせ、そして角と鱗を生じたところに、龍の影響がはっきりと認められる。ただし、大きな丸い目玉や大きな口および一列に並んだ歯などを見ると、その顔の基本的な特徴はそれほど変化していない。写真8は良渚文化中期、すなわち四八〇〇～四五〇〇年前の瑤山遺跡の大墓から出土したものであり、同時期の反山遺跡の大墓からも蟠螭文環状玉佩飾が数点出土しているの、「蟠螭文」は四八〇〇～四五〇〇年前、良渚文化の中心地（現在の浙江省余杭県）に誕生したのだと結論付けられよう。

5. 穀文璧に見る越族の動向

宮崎考古学会の会長日高正晴氏は2003年9月、『西都原古代文化を探る——東アジアの観点から』¹⁶⁾と題する著作を出版して、日向王之山の穀文璧と長江下流域の越族との関連について指摘した。そして同著において、中国広東省広州市の南越王墓博物館では日向王之山の穀文璧と「ほとんど同一形態で、同一文様の」玉璧が南越王の副葬品として展示されているのを自ら見たと証言している。小学館は2000年9月に『世界美術大全集・東洋編2』を出版したが、その中には、南越王墓博物館のその穀文璧の写真が収録されている。末頁の写真9と10がそれぞれであるが、直径が28.1cm、日向王之山のそれより5.23cmほど小さい。璧面の文様は確かに似ているが、大きな相違点と小さな相違点がそれぞれ一点ある。南越王墓博物館の穀文璧の内縁が「陽鳥文」ではなく、外縁と同様な「蟠螭文」であることは大きな相違点であるが、小さな相違点は螭頭の二本の角の間に刻まれた文様である。日向王之山の穀文璧のその文様が逆三角形でその中が穀文状になっているのに対して、南越王墓博物館の穀文璧のその文様は半円形でその中が穀文状になっている。この二点の相違点は、越文化におけるランクの違いを意味するものとは思いますが、現段階では、まだ具体的に解釈することができない。

一般的には、南越国といえば、BC203年、嶺南南海郡の軍事長官趙佗によって建国され、BC111年まで存在していた南越国が思い出される。しかし実際、秦の始皇帝が嶺南地方を支配する以前に、そこにはすでに南越国があった¹⁷⁾。しかしBC214年、その南越国は秦の始皇帝の大軍によって滅ぼされた。この意味では、BC203年、嶺南南海郡の軍事長官趙佗によって建国された南越国は以前の南越国の復権でもあったわけだが、こうして見ると、南越王墓から出土した穀文璧はもともと越族の伝世の神宝であった可能性が非常に高い。日高正晴氏も前掲の『西都原古代文化を探る——東アジアの観点から』第二部第一章第五節で、南越王墓から出土したその穀文璧は浙江省一帯、すなわち越の故地から南越国に持って行かれたのだと述べている。要するに、以上の歴史的な経緯から考えると、南越王墓の築造年代は漢代だからといって、そこから出土した玉璧を漢代のものだと即断できないのである。

2006年8月24日、筆者は上海博物館を見学したとき、その玉器展示室で、璧面の文様が日向王之山や南越王墓博物館の穀文璧と似ている穀文璧を発見した。末頁の写真11と12がそれぞれである。

この穀文璧は上海市青圃県福泉山遺跡から出土したもので、年代は中国戦国時代（BC475～221）と断定されている。福泉山遺跡はもともと良渚文化期に築造された墳丘墓であり、そこから良渚初期から晩期に至るまでのすべての時期の良渚遺物が出土している。何千年来良渚文化の中心地の一つであった福泉山遺跡から、「穀文」と「蟠螭文」が彫られた玉璧が出土していることには、この種の玉璧の文化的蘊奥が感じられるが、日向王之山や南越王墓博物館の穀文璧と比較してみると、上海博物館の穀文璧には内縁がないことが分かる。同タイプの穀文璧とはいえ、装飾上の違いが明らかに存在しているのである。

これまで、中国では戦国時代～漢代の穀文璧が相当出土している。しかし、日向王之山のその穀文璧と同様な文様を持つ璧がまだ見つかっていない。そして、33.3cmの直径は近現代の一尺を連想させるし、何の傷も残っていない完璧さも本当に出土品であったかと疑わせるので、この穀文璧の製作年代について、確かに不安材料が残っている。しかし、太陽神と山神を合体させたその文様には、良渚文化の古い伝統が認められる。本論第2節では、反山遺跡から出土した玉鉞に太陽神と山神を合体させた神徽が刻まれていることについて論じたが、日向王之山のその玉璧はモチーフの面で全くそれと通じている。そして、「穀文」と「蟠螭文」の組み合わせが確かに戦国時代の越地方で大いに流行していた文様なので、この意味では、日向王之山の玉璧は中国戦国時代の越地方で作られ、しかも良渚文化の伝統的な発想を全面的に受け継いだ最高ランクの穀文璧だと考えられるのである。

1977年～78年、山東省博物館などの主管部署が山東省曲阜市魯国故城遺跡西側の戦国時代の墓地「望父台」を整理したところ、その第52号墓から南越王墓博物館の穀文璧と酷似した穀文璧が出土した。末頁の写真13がそれである。この穀文璧について、『中国文物大典①』¹⁸⁾は、「この様式の玉璧は戦国晩期の典型的器物であり、前漢と後漢の玉璧にも大変大きな影響を与えた」と解説している。

魯国故城遺跡の穀文璧は文様上、南越王墓博物館の穀文璧と99%共通しているが、小さな相違点が一点あり、すなわち魯国故城遺跡の穀文璧に刻まれた螭の角の下二つの菱形空間には、目玉が刻まれていないということである。南越王墓博物館の穀文璧には丸くて大きな目玉が刻まれており、これはすなわち良渚文化期の山神「觥」の目玉である。実は上海博物館の穀文璧にも丸くて大きな目玉が刻まれており、そこには越族特有な山岳信仰が確認される。たとえ戦国時代の晩期になったとしても、この丸くて大きな目玉があるかどうかによって、所持者が越族であったかどうかややはり分かるのである。

山東省は大汶口文化期や龍山文化期から一貫して長江下流域の良渚文化の影響を受けてきた。とりわけ長江下流域に越国を建てた越王句踐がBC468年に越国の都を瑯琊に移した後、山東省全域は直接越文化の支配下に置かれるようになり、この状況はBC379年に越国の都が再び長江下流域に遷される時まで続いていた。しかし、山東省の人びとは結局越族ではないから、完全に同化

して越族の山岳信仰を持つことができなかった。魯国故城遺跡の玉璧に良渚文化期の山神「觥」の目玉が刻まれていないのは、まさにその証拠である。

しかし、日向王之山に伝わってきた穀文璧には、丸くて大きな目玉が生き生きと刻まれている。これはすなわち、その穀文璧が戦国時代晩期に直接長江下流域から越族の人によって将来されたことを意味する。前掲の拙論「玉で結ぶ日本列島と長江下流域」で述べたが、その穀文璧を将来してきた人はすなわち越人のニギノミコトであり、将来してきた年代は秦の始皇帝が最終的に越国を滅ぼしたBC221であった。

6. 穀文璧の象徴的意義

玉璧が重要な礼器であったことは、周知のことである。しかしその意義については、まだ定説がない。

本論第2節で述べたが、璧は良渚文化の「三種の神器」の一つで、それ自体が重要な象徴的意義を持っていたのは確かである。しかし、良渚遺跡から出土した璧はすべて文様のない素面璧であり、そして、精製品と粗製品に分かれている。出土した璧の多くが粗製品であり、一基の墓から粗製品が何十枚も出土している事例もある。したがって現段階では、良渚文化の中で璧がどのような意味合いで用いられていたかがまだ不明である。もしかすると、これまで検討してきた玉鉞と石鉞のように、精製品と粗製品はそれぞれ異なった用途を持っていたのかもしれない。

日本の中国古玉研究家林巳奈夫氏はその著作『中国古玉の研究』¹⁹⁾ 第四章の附録「璧の象徴」で次のように述べている。

兎も角、天上に光る日と月は真中に何も無いのに、ここでは真中に圓がある形に表はされてある。これは璧の形と共通する。璧は本来日月の象であつたのではないか。中國古代に證される強い傳統性——河姆渡文化の日月の上に加はる山形の氣が何千年も形を變へずに漢に現れて来、日月を載せる鳥の殘存と思はれるものが漢代畫像磚に出て来る、逆梯形の神面が戦國にまで見出される等——を顧慮すると、漢代に檢證された璧の本質的に日、月と重なる性格——大いなる陽の「氣」、大いなる陰の「氣」のかたまり——は、河姆渡の中央に圓の入つた圓盤の形で表はされた日月に由來するものではなかつたかと思ひ至る。中央に圓孔を穿けた圓盤である璧は本来日月の象であつた。それは生産力——何よりも稻の——の根源である日の火の「氣」と水の「氣」の發生源を象つたものであつた。

璧が日月の象であつたという意見には賛成しかねるが、璧によって陰と陽が集合するという趣旨には全く賛成である。以上検討してきた戦国時代の蟠螭文穀文璧を観察すると、「蟠螭文」の蟠螭はもともと山神の虎なので、陽を象徴しているであろう。一方、「穀文」の穀はもともと大地に生える稲穀なので、陰を象徴していると理解される。このように陰と陽をそれぞれ象徴する二種類の文様が一枚の璧に刻まれているのは、当然のことながら陰陽交合の意味合いを持っている

るのである。

中国湖南省長沙市馬王堆1号漢墓から出土した木棺の側板には、「双龍穿壁図」(末頁の写真14を参照)が描かれており、その中に描かれている玉壁は素面壁ではなく、穀文壁であった。同様のモチーフを持つ「龍虎穿壁図」(末頁の図案2を参照)は前漢後半の王莽新朝期の洛陽金谷園墓室天井壁画にも見られ、そこに描かれている玉壁も穀文壁であった。洛陽金谷園墓室天井壁画の穀文壁を穿っているのは龍と虎である。龍は水を司るから陰を象徴し、虎は山を司るから陽を象徴する。陰と陽がともに穀文壁を穿ち、しかもその過程において交尾する。洛陽金谷園墓室天井壁画のこの「龍虎穿壁図」には、龍と虎が下方の壁の上で交尾しているシーンがはっきりと描き出されている。馬王堆1号漢墓の「双龍穿壁図」には、二匹の龍が描かれていると説明されているが、筆者の考えでは、描かれているのは二匹の龍ではなく、やはり洛陽金谷園墓室天井壁画の「龍虎穿壁図」と同様、龍一匹、虎一匹であろう。穀文壁の上方には二つの頭が描かれているが、よく見ると、それらの牙の形が異なっているし、鼻の形や頭の形も異なっている。このような違いは龍の雌雄よりも龍と虎を区別するための標識だと理解した方が自然であろう。向かって右の方が虎で、左の方が龍だと思われるが、龍と虎はすでに腰のところまで壁を穿っているのだから、その交尾はまさにその後の一瞬であろう。

このように確認してみると、穀文壁は一種の陰と陽を交合させる装置であり、いわば天地の陰門と称すべきものである。穀文壁には明らかに生産あるいは再生の意義が込められており、人間や稲穀などがこの穀文壁によって生産され再生されるのである。良渚時代の素面壁にこのような意義があったかどうかはまだ詳らかではないが、戦国時代以降の穀文壁、とりわけ蟠螭文穀文壁には、明らかにこのような意義が賦与されている。

日向王之山の穀文壁がもし本当に筆者が考えているように、ニニギノミコトが長江下流域の越国を脱出するときに持ち出したものだとすれば、彼がなぜ亡命の時にわざわざこの穀文壁を持ち出さなければならぬかを解釈する必要があるが、筆者の考えでは、最大の原因は穀文壁に生産や再生の神通力があると思われたからである。亡命先での子孫の繁栄と稲穀の豊作に対する期待を込めて、ニニギノミコトはこの穀文壁を日向の地に持ってきたのであろう。

『周礼・大宗伯』によると、「王は鎮圭を執る。公は桓圭を執る。侯は信圭を執る。伯は躬圭を執る。子は穀璧を執る。男は蒲璧を執る」という。すなわち周代では、穀文壁が高い身分を示す「身分証明書」ともなっており、貴族五階級の中の四番目「子」を示すのが「穀璧」の役割であった。そして、春秋戦国時代に入った後もこの玉を以って身分を示す礼儀作法が続いていたようで、越王句踐が呉国を滅ぼして、さらに周辺の国々を征伐しようとする時、宋、鄭、魯、衛、陳、蔡など周辺諸国の王はみな玉を執って越王の所へ挨拶に来たと『国語・呉語』に記録されている。このような時代背景を考えると、ニニギノミコトが日向の地に持ってきた穀文壁は彼自身の貴族の身分を示す「身分証明書」でもあり、「子」という貴族の階級から見ると、彼はもともと若い

王孫のようにも思われる。『古事記』には、天照大神が自分の若い孫ニニギノミコトを日向の高千穂に降臨させたことが記されているが、「ニニギ」は「ニ」（玉）を「ニギ」（握）るという原義なので、日向の高千穂に降臨させた時、天照大神が孫のニニギノミコトに玉を握らせたことが明らかになる。このことを日向王之山から出土した穀文璧と結び付けて考えると、『古事記』のこのくだりの記述には相当な歴史的眞実が含まれているのである。

最後に、穀文璧の使われ方について少し触れたいが、馬王堆1号漢墓の「双龍穿璧図」と洛陽金谷園墓室天井壁画「龍虎穿璧図」に描かれているように、それらが絹製の帯や紐で祭壇の上方に吊るし上げられ、その後、人びとは冥々の中の龍と虎がその真ん中の円孔を穿って交尾するように呪文をかけていたであろう。『山海経・西山経』²⁰⁾に、

隃山の神や、之を祠るには燭を用ひ〔或いは煬に作る〕、齋すること百日、百犧を以てし〔牲の純色なる者を犧と為す〕、瘞むるに百瑜を以てす〔瑜も亦美玉の名。音は臯〕。其の酒を湯〔或いは温に作る〕むること百樽〔酒を温めて熱せしむ〕、嬰ぬるに百珪・百璧を以てす〔嬰は之を陳ねて以て環祭するを謂ふなり。或いは曰く、嬰は即ち古の罍の字、盃を謂ふなり。徐州にて云ふと。『穆天子伝』に黄金の嬰と曰ふの属なり〕。

とあるが、「嬰ぬるに百珪・百璧を以てす」という記述が馬王堆1号漢墓の「双龍穿璧図」と完全に合致している。「嬰」という動詞には、「めぐる。めぐらす」と「紐などでかける。つなぐ」と「つらぬる。つらなる」の三つの意味がある。上の引用では、「嬰」は三番目の「嬰ぬる」（つらぬる）と訳され、「之を陳ねて以て環祭する」と解釈されているが、筆者の考えでは、この「嬰」は二番目の「紐などでかける。つなぐ」と解釈すべきで、馬王堆1号漢墓の「双龍穿璧図」がその映像的証拠である。

注

- 1) 李国棟「玉で結ぶ日本列島と長江下流域」、『広島大学大学院文学研究科論集』第66号所収。
- 2) 山形県沿海側の鶴岡市や酒田市および飽海郡には、腰（こし）、堀越（ほりこし）、砂越（すなこし）、山越（やまこし）、寅ノ越（とらのこし）、宮ノ越（みやのこし）など「こし」を含む地名がたくさん残っていることから判断すれば、山形県の沿海側も大昔「こし」（越）の一部であったと考えられる。
 実は、秋田県の秋田市、能代市、横手市と青森県の青森市、津軽郡、つがる市、弘前市にも数多くの「こし」を含む地名があるので、弥生時代までの「こし」地方は福井県から青森県までの日本海側を指していたのではないかと思われる。
- 3) 陳橋駅「越族の発展と流散」（陳橋駅著『呉越文化論叢』所収。中華書局、1999年12月）とスチュアート・ヘンリ「海進・海退（Ⅰ）」（加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究』第一巻所収。雄山閣、1982年2月）

- 4) 浅川利一・梅本成視「山形県の縄文遺跡から出土した中国古代の有孔石斧」、浅川利一・安孫子昭二編『縄文時代の渡来文化——刻文付有孔石斧とその周辺』（雄山閣、2002年10月）所収。
- 5～8) 同4。
- 9) 前掲の『縄文時代の渡来文化——刻文付有孔石斧とその周辺』所収。
- 10) 中国の著名な考古学者嚴文明氏は「良渚文化と中国文明の起源」（『日中文化研究第11号・良渚文化』勉誠社、1999年11月）と題する論文で考古学的証拠を具体的にあげている。
- 11) 杜金鵬・楊菊華編著『中国史前遺宝・黄河下游遠古文化』（上海文化出版社、2000年7月）
- 12) 京都府舞鶴市教育委員会には、縄文前期の、長さ4.6m、幅約1 mの丸太舟の残部（杉材）が収蔵されており、新潟県立歴史博物館にはまた、縄文晩期の、長さ5.4m、幅0.8 mの丸太舟の残部（枹材）が展示されている。そのほかに、福井県立若狭歴史民俗資料館には、縄文前期の丸太舟の残部（杉材）と縄文後期の完全な形の丸太舟（杉材）も展示されている。
- 13) 森浩一編『日本の古代2 列島の地域文化』（中公文庫、1995年11日）
- 14) 稲盛和夫監修、梅原猛・安田喜憲共著『長江文明の探究』第Ⅲ部（新思索社、2004年8月）
- 15) 鎌田正・米山寅太郎著『漢語林』（大修館書店、1984年7月）
- 16) 日高正晴著『西都原古代文化を探る——東アジアの観点から』（鉦脈社、2003年9月）
- 17) 陳橋駅「越族の発展と流散」、陳橋駅著『吳越文化論叢』（中華書局、1999年12月）所収。
- 18) 『中国文物大典①・玉器』（中国大百科全書出版社、2001年1月）
- 19) 林巳奈夫著『中国古玉の研究』（吉川弘文館、1991年2月）
- 20) 前野直彬著『全釈漢文大系第33巻 山海経・列仙伝』（集英社、1975年10月）

写真注

- 1) 筆者撮影、新潟県立歴史博物館蔵。
- 2～3) 陳同樂・陳江編撰『老骨董鑑賞袖珍手冊・良渚玉器』（江蘇美術出版社、1999年12月）からの転写。
- 4) 『世界美術大全集・東洋編1』（小学館、2000年9月）からの転写。
- 5～6) 前田育徳会蔵。開館記念特別展『遺物たちの帰郷展・展図録』（宮崎県立西都原考古博物館編集、2004年4月）からの転写。
- 7～8) 同②。
- 9～10) 『世界美術大全集・東洋編2』（小学館、1998年7月）からの転写。
- 11～12) 『上海博物館中国古代玉器館』からの転写。
- 13) 同④。
- 14) 同⑨。

図案注

- 1) 陳同樂・陳江編撰『老骨董鑑賞袖珍手冊・良渚玉器』（江蘇美術出版社、1999年12月）からの転載。
- 2) 林巳奈夫著『中國古玉の研究』（吉川弘文館、1991年2月）からの転載。



写真 1



写真 3



写真 2



写真 4



写真5



写真8



写真6



写真9



写真7



写真10



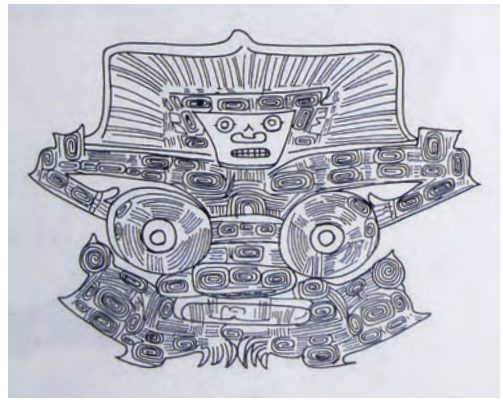
写真11



写真14



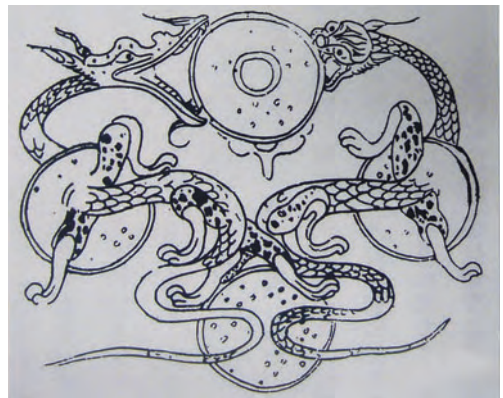
写真12



図案1



写真13



図案2

山形县中川代遗址出土的石钺与日向王之山出土的玉璧

李 国 栋

日本山形县中川代遗址出土了一件3300年前的中国石钺。石钺正面孔下有酷似甲骨文“之”字的刻文（参看照片1）。

石钺起源极其悠久，是长江下游“内越”的象征。良渚文化时期玉钺出现，于是，玉钺象征显贵的身份和至高无上的权力，而石钺则有了别的用途。同一时期，日本列岛“外越”居住的“越”地区也出现了大量类似石钺的石斧，而且有些石斧根本就没有使用痕迹。笔者推测，石钺和一部分石斧曾是“内越”和“外越”互做海外贸易时的身份证及贸易许可证，日本山形县中川代遗址出土的那件石钺，正是在这个背景下由“内越”带到“外越”来的。

1818年2月，从日本九州最南端的日向地区王之山的石棺中出土了一块“蟠螭纹谷纹璧”（参看照片5，6）。这块玉璧带有明显的“内越”文化色彩，流行于中国战国晚期。从广州市南越王墓和上海市福泉山遗址出土的类似的“蟠螭纹谷纹璧”看，日向王之山出土的这块玉璧应是“内越”的一个贵族男子为了躲避秦始皇的迫害，于公元前221年由长江下游的越国随身带过来的，而且这个贵族男子很可能就是《故事记》和《日本书纪》所记载的“ニニギノミコト”。